

巻頭言

情報過剰時代

兵庫県立尼崎病院院長 牧野 尚彦

近ごろはまさに情報の洪水である。マスメディアはもちろんのことだが、もっと身近なところでも、ともすれば私たちは情報の波に溺れそうになる。

例えば私の机の上には、毎日のように雑誌やパンフレットや院内各部門からの通知や資料などが山積みになる。決裁の判を押す公式書類は別としてだ。ざっと目を通してセレクトし、要らないものはポイ、処理済みのものはポイ。そうして躍起になって整理するのだが、屑入れはたいてい夕方までには満杯になる。それでもなお、どうしてもしばらくは手元に残しておかなければならない書類も多いので、これらが積み積み部屋を占拠してしまう。パソコンやコピー機の進歩はありがたいけれど、これらが日々吐き出す紙の量といったら恐ろしいものだ。

私は書類の整理が苦手（いや単に几帳面でないだけのことなのだが）なので、そんなに古い書類を山ほど貯めこんでも、きちっとした索引がないかぎりは探しようがない。探しようがないのなら、置いてても無駄だという論法で、時々整理して捨てまくることにしている。実際残しておいても、半年も一年も取り出すことがないようなものがほとんどであるから、捨てた後で後悔することはまずない。さすがに事務部門は、管理資料や会議記録などを克明にファイルしてくれているから、必要ときはそれを出してもらえばよい。甘え

ているようだが、もし本格的に索引を作って全書類を整理するとなると、それだけで日が暮れてしまいそうだ。

だが未解決の懸案事項については、これは自分なりに整理しておかなくてはならない。折衝や指示の記録を残し、付箋をつけ、索引を作り、そして主要事項を列挙したメモを、いつも目につくように机の上に置いて進行管理する。

かつて外科部長だった頃は、懸案事項といっても数が知れているし、頭の中のメモリーに頼っても特に不都合はなかった。しかし院長となると、事項は極めて複雑多岐になり、個人の記憶や注意力では到底まかないきれなくなる。たぶん加齢による近時記憶とやらの能力の減退がからんでいるのかも知れない。そんなわけで不精な私も少しは改心せざるを得なくなったしだいである。

ただその反面、情報の氾濫に巻き込まれないような注意は必要である。選択眼、捨てる勇氣、そして残すならばいつでも検索可能な残し方をしなければ意味がないし、更に、残したものについては再利用の実績によって、必要最小限に絞っていかねばならない。何か利用価値がありそうだと思って残したものが、結局は埃をかぶっていることの何と多いことか。自分でできないことを言うのもどうかと思うけれど、少なくとも心構えだけはそうありたい。

その目で見ると、病院図書室もまた情報の洪水である。

一昔前と比べて、医学や看護関係などの雑誌が、いったいどれほど増えたことだろう。それなのに利用する職員数は別に増えたわけでもないし、利用する時間にそれほど余裕ができたわけでもない。要するに、一雑誌あたりの利用度はかなり落ちていると考えざるを得ないのである。実際、同系の雑誌をいくつか並べて読んでみると、同じような著者が似たようなテーマで、同工異曲の記事を書いているのにしばしば出くわす。考えてみればそれも当然のことで、たしかに学問の範囲が広がって進歩は加速しているが、かといって情報を発信する側が以前に倍する業績を上げ、毎度のように新知見を生み出せるはずがないではないか。

さすがにこれほど情報が溢れてくると、やむにやまれずとはいえ、その検索システムが完備してきたことは、まことにありがたい。それはコンピュータの発達のおかげであり、我々はどこからでも世界中の文献にアクセスすることが可能である。

ただ、そういうご時勢になってなおかつ、どこの病院の図書室もあれもこれもと雑誌を買い込み、利用度の割に経費がかさむというのはコストバランスが悪すぎないだろうか。もちろん医師をはじめ職員は何でも手元に置きたがるだろうが、そんなに書物を貯め込んでも、完備したインデックスがなければ結局十分に活用できないし、逆にインデックスに頼るならば、原本がどこの図書室にあらうと利用できるわけである。

せっかく近畿病院図書室協議会という立派な組織があるのだから、基本的なものは別として、この雑誌はどこ、あの本はどこ、といった具合に分担購入し、その代わり依頼があればすぐに文献コピーを送るといったシステム作りができないだろうか。もちろんそのためには、検索システムの共有や要員の確保といった問題を解決しなければならないが、それだけの価値はあると思うのである。

図書室としては蔵書の縮小という寂しさもあるし、出版社は講読部数が減って落胆するだろうけれど、情報量のとめどもない増大と広域化に対抗するには、そういった方向性を考えることが必要ではなからうか。